

佐田三季  
Illustration  
miuki sada  
麻生ミツ晃  
mitsuaki asou

「あの日、校舎の階段で」番外編

0.03

© 心交社

この作品は（株）心交社に帰属します。  
無断複写・複製・転載を禁じます。

笠井亭は、唇の端をつりあげてふつと笑った。ダブルベッドのマットレスとベッドパッドは、少し奮発しているものを買った。やわらかすぎず、硬すぎず、日々の疲れを癒すにはもってこいだ。気持ちがいい。

パッドシートも新しいものにした。色は生成りのオフホワイト。ふわふわ、ほわほわとして、羊の毛並みのようだ。

コトンのシートと比べると、あたたかさが雲泥の差だ。布団に入ったとき、ひやっとしないのがいい。おまけに、手触りがタンポポの綿毛を集めたような感じがして、最高だ。

「笠井、手……なんで」

自分の上にいる、遠藤圭祐がむつとしたように言う。メガネのないその顔に、子どものようなふてくされた表情が浮かぶ。

左手は遠藤の首にまわしたけれど、右手はパッドシートのふわふわを撫でていた。

「ああ。おまえ撫でるより、こっちのほうが手触りいいからな」

男の硬い筋肉質な背中よりも、ふわふわの方が掌に気持ちいいに決まって

いる。

当然だ、と言わんばかりの笠井に、遠藤はじつとりとした恨みのこもった目で見つめてきた。その湿ったまなざしに、笠井は溜め息をつく。

「その目、やめる。……もうだいたいじょうぶだから、さっさとゴムつけるよ」

「イヴなのに……」

「だからなんだ」

「……雰囲気がるでない」

ぶつぶつとぼやきながら、それでも遠藤がベッドヘッドの小さな棚に手をやった。棚についた小さな引きだしを、ごそごそと手で探る。

「……あれ」

当惑する声に、笠井は男を見やった。

「なんだよ」

「ゴム、切れてる」

「ふうん。じゃ、やめだな」

笠井はあっさりと言くと、遠藤の体を押しやった。ボックスティッシュに

手を伸ばし、ローションでべたつくそこを拭う。勃起していたけれど、半勃ちぐらいだから、放っておけばよかった。

さっさとベッドから抜けだし、クロゼットのタンスからボクサーパンツをだした。ついでに遠藤のも取ってやり、「ほらよ」と男に向かって投げる。

ボクサーパンツが遠藤の顔にはさりとぶつかって、手元に落ちた。

「取れよ、そんならい」

呆れた笠井が遠藤を見やると、遠藤が思い詰めた顔で口を開いた。

「笠井、ナマで——」

「死ねや」

言い切ると、遠藤は悲しげな顔をし、パンツを手にしてベッドから出た。パンツだけでなく、きっちりと服を着こむ。

「コンビニ。ゴム、買ってくる」

「はあ？」

笠井は啞然として、男を見つめた。なにを言っているのだろう、このバカは。

さつき、遠藤はメガネを踏んづけて壊したばかりだ。スペアのメガネくらいもっておけばいいのに、使い捨てのコンタクトレンズがあるから、と言った。

でも、まぬけなことにそれすらも切らしていた。

「見えないだろが。買ひ物は明日、メガネを直してからにしろ。つか、しなくたっていいだろ」

本音を言えば、明日は平日で、だから、あんまりしたくなかった。アナルセックスをすると、次の日が少しきつい。

「……いや、イヴだから」

そう言うと、遠藤はジャケットをひつつかんで部屋から出ていった。

笠井はがしがしと頭を搔いた。

前々からわからない男だが、本当にあの男は、わからない。イヴだから、なんだというのだ……。恋人がいるやつは、皆、イヴにぜったいセックスをするともいうのか、義務か、アホか。

開けはなったスライドドアの向こう、リビングを見やった。黒いローソ

ファーの前のテーブルに、さつきまでの食事の残骸、スパークリングワインの飲み残しがある。

エビとプロッコリーのサラダ、タンダーチキン、ピザ。皆、遠藤が買って来たものだ。

ローソファーの横に置いてある段ボール、遠藤からのプレゼントを見る。段ボールには、ほしかつたりリイパイプとメタルハライドランプが入っている。いずれも買うのをためらっていた水槽用品だ。

「チッ」

笠井は舌打ちして、脱ぎ散らかした衣服を拾い、身につけた。

以前、目の悪い同僚がメガネを壊し、「会社の机にスペアのメガネがあるからさあ、必死に来たんだ。駅の階段で死ぬかと思った」と言っていたのを思い出す。そいつは、そのときコケて足首をひねり、しばらく整形外科に通っていた。

外に出ると、寒さが斬りつけるようだ。ぶるりと震え、ダウンジャケットのファスナーを首まであげた。

近くのコンビニまでの道を急ぎながら、男の背を探す。

もうコンビニか。

笠井はそつとコンビニの明るい窓のなかを見やった。背の高い男が、棚の前で佇んでいる。

遠藤の姿を見つけたことに少しほつとして、笠井はコンビニのドアをくぐった。遠藤の元には行かずに、ビールの棚を物色する。目当ての缶ビールを二本もち、横目で遠藤を見やる。

なんだ、あいつ……。

遠藤は、目を細めていた。コンドームの箱を目の前まで近づけて、それを真剣な顔つきで凝視していた。

客の、二十歳くらいの女の子がそんな遠藤に気がついたようだ。なにか嫌な虫でも見るかのような目で遠藤を見ると、絆創膏ばんそうこうを手にして、足早に通り過ぎていく。

説明文を読んでいるのだろうか、いや、でも、コンビニでああいうものを買うとき、説明文なんか読むだろうか。ふつう、さつとひつつかんで、ほか

のものといっしょにレジにだすだろう。

笠井は嫌そうに遠藤を眺めたあと、ビールをもってレジに向かった。

もとからコンビニのなかで遠藤に声をかけるつもりは、さらさらなかった。逆に遠藤から声をかけてもらいたくもない……。

レジ袋に入れてもらい、そつとコンビニから出る。出るころも、まだ遠藤はじつとコンドームの箱を目の前で見つめていた。笠井はそれを見やり、小さく溜め息をついた。

あいつ、やっぱ、なんか、すごく……気持ち悪い。

コンビニから少し離れたところで、遠藤を待つ。待ちながら、溜め息をつく。

正気に返るのは、こんなときだ。

俺、なにをどうまちがえて、あんなのを？ 自分で、自分が謎だった。

首をかしげていると、小さなレジ袋を手にはら下げた遠藤が歩いてきた。

コンドームしか買わなかったようだ。小さな紙の袋に包まれたものが、レジ袋に入っている。

「笠井？　なんで」

「迎えに、とは言いたくない。笠井は苛々と遠藤を見やった。」

「ああいうの、さっと買うもんだろう。なにやってんだ、ぐずぐずと」

「表示がさ、ないのもあって」

「なんの」

「薄さの。ほしいのはさ、0・02なんだよ。でもなかったから、0・03。やっぱ、コンビニはコンビニだな。品ぞろえが悪い」

「そう変わらないだろう、なんだって」

溜め息混じりに言うと、遠藤がしごく真面目な顔で答えた。

「ちがう。ぬくもりがまるでちがう。やっぱ、ポリウレタン素材がいちばんだ」

そう言いながら、遠藤が段差のあるところで、つんのめった。

笠井は小さく舌打ちし、遠藤に掌を差しだした。

「ほら。おまえ、どんだけ見えないんだ」

遠藤はうれしそうに口元をほころばせると、笠井の手をぎゅっと握りしめ

てきた。

ひとの目は、とても気になる。とても気になるが、深夜だし、目が悪いら仕方がない。これは……介助だ、介添えだ、介護のようなものだ。

「0・03」

ぼつりと遠藤が言う。

「またゴムの話か」と見やると、遠藤は「視力だ」と笑った。

「0・03？　それじゃ、なんにも見えないんじゃないのか」

笠井の視力は1・0だ。子どものころは2・0だったから、ずっと下がったけれど、それでもメガネはいらない。だから、0・03だというその視界が想像もつかない。

「うん。なんにも見えない。おまえだけしか見えない」

言うなり、手をぎゅつとさらに強く握られる。笠井は「あっ、そう」と、そっぽを向いた。そんなことを言うてくるので、手が汗ばんで困った。

笠井は隣を歩く男をちらりと見やった。遠藤はバカみたいに上機嫌で、しまりなくへらへらと笑っている。ただ手をつなぐだけなのに、なにがそんな

にうれしいのか。おかしくなって、少し笑った。

明日は平日だけど、まあしかたない。わざわざ買ったんだから、つきあう  
しかないだろう。

了